2023 年 11 月 26 日（日）　1 コリ 1：1〜3　あいさつ

コリント人への手紙第一　1 回
あいさつ　―聖化について考える―
1：1〜3

はじめに

1. 時系列から見たパウロとコリント教会の関係

（1）コリントでの開拓伝道（使 18 章）

①使 18：9〜11

Act 18:9 ある夜、主は幻によってパウロに言われた。「恐れないで、語り続けなさい。黙ってはいけない。

Act 18:10 わたしがあなたとともにいるので、あなたを襲って危害を加える者はいない。この町には、わたしの民がたくさんいるのだから。」

Act 18:11 そこで、パウロは一年六か月の間腰を据えて、彼らの間で神のことばを教え続けた。

②コリントでの宣教は、容易なものではなかった。

③この宣教は 1 年半続いた。複数の家の教会が誕生したことであろう。

（2）第一の手紙（「前の手紙」。残っていない）

①1 コリ 5：9

1Co 5:9 私は前の手紙で、淫らな行いをする者たちと付き合わないようにと書きました。

②パウロは、第一の手紙を書いて、教会の浄化について教えた。

（3）クロエの家の者たちの情報と教会からの手紙

①1 コリ 1：11

1Co 1:11 私の兄弟たち。実は、あなたがたの間に争いがあると、クロエの家の者から知らされました。

②1 コリ 7：1

1Co 7:1 さて、「男が女に触れないのは良いことだ」と、あなたがたが書いてきたことについてですが、

（4）第二の手紙（コリント人への手紙第一）

①これは、ローマ人への手紙やエペソ人への手紙のような神学書ではない。

②これは、現実問題を取り上げた牧会的書である。

③コリント教会の諸問題が、後の信者たちにとって教訓となる。

(5)「あなた方を悲しませる訪問」

①2 コリ 2：1

2Co 2:1 そこで私は、あなたがたを悲しませる訪問は二度としない、と決心しました。

②この訪問は、期待外れの結果に終わった。

(6) 第三の手紙（「あの手紙」。残っていない）

①2 コリ 2：3〜4

2Co 2:3 あの手紙を書いたのは、私が訪れるときに、私に喜びをもたらすはずの人たちから、悲しみを受けることがないようにするためでした。私の喜びがあなたがたすべての喜びであると、私はあなたがたすべてについて確信しています。

2Co 2:4 私は大きな苦しみと心の嘆きから、涙ながらにあなたがたに手紙を書きました。それは、あなたがたを悲しませるためではなく、私があなたがたに対して抱いている、あふれるばかりの愛を、あなたがたに知ってもらうためでした。

②第三の手紙は、涙ながらに書かれたものである。

(7) 第四の手紙（コリント人への手紙第二）

①パウロは、マケドニアからコリントに向かおうとしている。

②三度目の訪問の準備として、この手紙を書き送った。

③パウロの内面が深く表現されている。

(8) 三度目の訪問の予告

①2 コリ 13：1

2Co 13:1 私があなたがたのところに行くのは、これで三度目です。二人または三人の証人の証言によって、すべてのことは立証されなければなりません。

②「二人または三人の証人の証言」とは、コリント訪問の回数であろう。

2. この手紙の概略

(1) 著者は使徒パウロ。

①彼は 2 度、自己紹介をしている（1：1、16：21）。

②4 回自分のことを「使徒」と呼んでいる（1：1、4：9、9：1、15：9）。

(2) 宛先はコリントの教会。

①コリントは、アカヤ州の首都で、東西に移動するための要衝の地である。

②ローマ帝国内で 4 番目に大きな町。

＊商業都市、文化都市、堕落した都市、偶像礼拝の都市

＊「korinthiazomai」とい動詞が生まれたほどである（堕落した生活）。

③この教会の土台を築いたのはパウロであるが、多くの問題があった。

(3) 執筆年代と執筆目的

①パウロは、紀元 55 年頃に、エペソにあってこの手紙を書いた。

②パウロは、位置的聖化を実際的聖化に高めようと努力した。

3. アウトライン

(1) あいさつ（1〜3 節）

(2) 感謝の祈り（4〜9 節）

4. 結論：聖化の種類

コリント人への手紙第一のイントロダクションについて学ぶ。

Ⅰ．あいさつ（1〜3 節）

1. 1 節

1Co 1:1 神のみこころによりキリスト・イエスの使徒として召されたパウロと、兄弟ソステネから、

(1) パウロの自己紹介

①「イエスの使徒として召された」は、著者パウロの権威を保証している、

＊ロマ 1：1

Rom 1:1 キリスト・イエスのしもべ、神の福音のために選び出され、使徒として召されたパウロから。

＊12 使徒の中には含まれないが、彼らと同じ特権と権威を受けている。

②「神のみこころにより」は、著者パウロの権威を補強している。

＊エペ 1：1

Eph 1:1 神のみこころによるキリスト・イエスの使徒パウロから、キリスト・イエスにある忠実なエペソの聖徒たちへ。

(2) 兄弟ソステネの紹介

①ソステネは、よくある名前である。

②使 18：17 に登場する会堂司のソステネであるという証拠はない。

Act 18:17 そこで皆は会堂司ソステネを捕らえ、法廷の前で打ちたたいた。ガリオは、そのようなことは少しも気にしなかった。

③彼は、コリント教会ではよく知られた人物であった。

④この手紙の書記だった可能性がある。

2. 2 節

1Co 1:2 コリントにある神の教会へ。すなわち、いたるところで私たちの主イエス・キリストの名を呼び求めているすべての人とともに、キリスト・イエスにあって聖なる者とされ、聖徒として召された方々へ。主はそのすべての人の主であり、私たちの主です。

(1)「コリントにある神の教会へ」

①コリント教会には分裂があった。

②それにもかかわらず、コリント教会は「神の教会」である。

＊恐らく、多数の家の教会が存在していたであろう。

(2) コリント教会の信者の特徴

①彼らは、普遍的教会に属している。

＊「いたるところで私たちの主イエス・キリストの名を呼び求めているすべての人」

＊パウロの宣教以外の方法で救われた人たちが多くいる。

＊イエス・キリストを信じるすべての人は、普遍的教会の会員である。

＊それゆえ、普遍的教会の中の問題児となってはならない。

②彼らは、聖なる者とされている。

＊位置的聖化を体験している。

＊キリスト･イエスにあって聖なる者とされている。

＊義認は、イエス・キリストを信じた段階で与えられる。

＊聖化は、その時点から始まるプロセスである。

③彼らは、聖徒として召されている。

＊この世からは選び分けられている。

④彼らは、罪を犯す聖徒たちである。

＊信仰の成長とは、聖徒としての内面と行為が一致することである。

3. 3 節

1Co 1:3 私たちの父なる神と主イエス・キリストから、恵みと平安があなたがたにありますように。

(1)「恵み」

①彼らは、恵みによって救われ、教会の一員とされた。

②彼らは、恵みによってお互いを扱うように期待されている。

(2)「平安」

①恵みによってお互いを扱うなら、お互いの間に平和な関係が生まれる。

(3)「私たちの父なる神と主イエス・キリストから」

①神は、ご自身に信頼する者の内に、恵みと平安をもたらしてくださる。

②恵みと平安は、父なる神と主イエス・キリストから与えられる。

結論：聖化の種類

1. 予備的聖化

(1) 信者は、救われる前から選ばれている。

①神は、その人が福音を聞いて信じるように予定された。

②2 テサ 2：13

2Th 2:13 しかし、主に愛されている兄弟たち。私たちはあなたがたのことについて、いつも神に感謝しなければなりません。神が、御霊による聖別と、真理に対する信仰によって、あなたがたを初穂として救いに選ばれたからです。

2. 位置的聖化

(1) 信者は、メシアの内にあることによって、神の目からは完成したと見なされる。

①その信者の内的状態に関係なく、完成したと見なされる。

②すべての信者は、この意味での「聖化」を得ている。

③聖句

＊使 20：32、ロマ 6 ： 1 ～10、ヘブ 10：10、14

(2) コリント教会の信徒たちは、「聖徒」と呼ばれている。

①この意味での聖化があるがゆえに、信者は聖なる生活を志す必要がある。

3. 漸進的聖化（経験的聖化）

(1) 漸進的聖化とは、罪の力から解放されることである。

①信者の内的実質と「神の目から見た判断」とが一致することである。

(2) 聖化されているという事実と、外的行為とが一致することである。

①この世の生活においては、聖化の完成はない。

(3) 死んでパラダイスに上げられた魂は、そこで完全なものとされる。

(4) 全人的な聖化は、メシア来臨（携挙）のときに完成する。

①聖句

＊エペ 5 ：27、1 テサ 3 ：13、 5 ：22～23

＊ヘブ 9 ：28、10：14、1 ヨハ 3 ： 2

4. 聖化における信者の責務

（1）受動的責務

①神の働きに自らを委ねる。

②神的受動態（ロマ 12：1～2）

（2）能動的責務

①神の御心を選ぶ。

②ロマ 8：13～14

Rom 8:13 もし肉に従って生きるなら、あなたがたは死ぬことになります。しかし、もし御霊によってからだの行いを殺すなら、あなたがたは生きます。

Rom 8:14 神の御霊に導かれる人はみな、神の子どもです。

コリント人への手紙第一　2 回
感謝の祈り
1：4〜9

はじめに

1. 時系列から見たパウロとコリント教会の関係
   (1) コリントでの開拓伝道（使 18 章）
   (2) 第一の手紙（「前の手紙」。残っていない）
   (3) クロエの家の者たちの情報と教会からの手紙
   (4) 第二の手紙（コリント人への手紙第一）
   (5)「あなた方を悲しませる訪問」
   (6) 第三の手紙（「あの手紙」。残っていない）
   (7) 第四の手紙（コリント人への手紙第二）
   (8) 三度目の訪問の予告

2. 宛先はコリントの教会。
   (1) コリントは、アカヤ州の首都で、東西に移動するための要衝の地である。
      ①コリントは、ローマ帝国内で 4 番目に大きな町。
      ②商業都市、文化都市、堕落した都市、偶像礼拝の都市
      ③「korinthiazomai」という動詞が生まれたほどである（堕落した生活）。
      ④この教会の土台を築いたのはパウロであるが、多くの問題があった。
      ⑤それにもかかわらず、パウロは神に感謝することができた。
   (2) パウロは、位置的聖化を実際的聖化に高めようと努力した。
      ①各信者の聖化は、教会の完成を意味する。
      ②コリント人への手紙第一の主要テーマは、教会の完成である。

3. アウトライン
   (1) あいさつ（1〜3 節）
   (2) 感謝の祈り（4〜9 節）

4. 結論：主イエス・キリストとの交わり
   (1) 1 コリ 1：9
   (2) 1 ヨハ 1：3〜4

コリント人への手紙第一のイントロダクションについて学ぶ。

Ⅱ．感謝の祈り（4〜9 節）

1. 4 節

1Co 1:4 私は、キリスト・イエスにあってあなたがたに与えられた神の恵みのゆえに、あなたがたのことをいつも私の神に感謝しています。

(1) パウロは、コリントの信者のことをいつも神に感謝している。

①継続した感謝の祈りである。

②問題の多い教会について神に感謝できるのは、パウロの素晴らしい点である。

(2) 感謝の理由は、キリスト･イエスにあって彼らに与えられた神の恵みである。

①彼らには、神の恵みが与えられていた。

＊彼らは、恵みによって救われた。

＊彼らは、恵みによって御霊の賜物を受けた。

②神の恵みは、キリスト･イエスにあって彼らに与えられている。

＊イエス・キリストという呼称は、人性に強調点がある。

＊キリスト･イエスという呼称は、神性に強調点がある。

③ここでパウロは、キリストの主権（神性）を強調している。

2. 5 節

1Co 1:5 あなたがたはすべての点で、あらゆることばとあらゆる知識において、キリストにあって豊かな者とされました。

(1)「あらゆることばとあらゆる知識において」

①「ことば」は「ロゴス」、「知識」は「グノーシス」である。

②「ロゴス」と「グノーシス」は、コリント人たちが重視した賜物である。

③「ロゴス」は、1 コリと 2 コリで、26 回出てくる（他のパウロ書簡では 58 回）。

④「グノーシス」は、1 コリと 2 コリで、16 回出てくる（他の書簡では 7 回）。

(2) 12：4〜11 に御霊の賜物のリストが出てくる。

①知恵のことば、知識のことば、預言、霊を見分ける力、異言、異言を解き明かす力

②コリントの信者たちは、キリストにあって豊かな者とされた。

③しかし彼らは、どの御霊の賜物がすぐれているかについて争っていた。

④パウロは、その状態を修正しようとした。

3. 6 節

1Co 1:6 キリストについての証しが、あなたがたの中で確かなものとなったからです。

(1) 御霊の賜物の付与は、福音のメッセージの信頼性を証明した。

①「キリストについての証し」とは、福音のことである。

②福音を信じた者には、御霊の賜物が与えられる。

③ヘブ 2：3〜4

Heb 2:3 こんなにすばらしい救いをないがしろにした場合、私たちはどうして処罰を逃れることができるでしょう。この救いは、初めに主によって語られ、それを聞いた人たちが確かなものとして私たちに示したものです。

Heb 2:4 そのうえ神も、しるしと不思議と様々な力あるわざにより、また、みこころにしたがって聖霊が分け与えてくださる賜物によって、救いを証ししてくださいました。

4. 7 節

1Co 1:7 その結果、あなたがたはどんな賜物にも欠けることがなく、熱心に私たちの主イエス・キリストの現れを待ち望むようになっています。

(1) パウロは、豊かな賜物のゆえに神をたたえている。

①コリント教会には、ほかの教会に負けないほどの賜物が与えられていた。

②賜物は、神の恵みによって与えられるので、彼らの手柄ではない。

③彼らは、御霊の実に欠けていたが、パウロは、ここではその点に触れない。

④先に行ってから、その問題を指摘する。

(2) 主イエス・キリストの現れも、神の賜物である。

①彼らは、その賜物も熱心に待ち望むようになった。

②「主イエス・キリストの現れ」とは、携挙である。

＊これを再臨と解釈する学者もいるが、ここでは携挙だと解釈する。

③当時の信者たちは、携挙の切迫性を信じていた。

5. 8 節

1Co 1:8 主はあなたがたを最後まで堅く保って、私たちの主イエス・キリストの日に責められるところがない者としてくださいます。

(1) パウロは、主の守りを確信している。

①「主イエス・キリストの日」まで、主の守りがある。

(2)「主イエス・キリストの日」と「主の日」は異なる。

①「主イエス・キリストの日」とは、携挙の日のことである。

＊携挙された聖徒たちは、褒賞のための裁きを受ける。

②「主の日」とは、患難期とそれに続く罪のさばきの日である。

＊ユダヤ人の不信者と異邦人の不信者は、神のさばきを受ける。

(3)「責められるところがない者としてくださいます」

①すべてに信者が、罪のない者として、キリストの御座の裁きに立つ。

②コリントの信者の功績ではなく、神の御業のゆえに、これが成就する。

③神は、私たちの罪をキリストの転嫁し、キリストの義を私たちに転嫁された。

6. 9 節

1Co 1:9 神は真実です。その神に召されて、あなたがたは神の御子、私たちの主イエス・キリストとの交わりに入れられたのです。

(1) パウロの関心事は、彼らが神の御子との交わりを深めることである。

①人間関係においても、周りの人との交わりには程度の差がある。

②主イエス・キリストとの交わりについても、同じことが言える。

(2) 主イエス・キリストとの交わり

①私たちは、主イエスを信じたときに、このお方との交わりに入れられた。

②しかし、クリスチャン全員が同じ程度の交わりを経験しているわけではない。

③交わりの深さは、どの程度主イエスを信頼し、従っているかによって決まる。

(3) コリントの信者たちは、主イエスとの交わりを深めることができていなかった。

①彼らの関心は、自分に向けられていた。

②パウロは、彼らの関心を「自分」から「主イエス」に向けさせようとした。

(4) 4～9 節で、パウロは神と主イエス・キリストへの信頼を告白した。

①その信頼に基づいて、コリントの信者たちに助言するのである。

結論：主イエス・キリストとの交わり

1. 1 コリ 1：9

1Co 1:9 神は真実です。その神に召されて、あなたがたは神の御子、私たちの主イエス・キリストとの交わりに入れられたのです。

(1) パウロは、神が過去にしてくださったこと、将来してくださることを語り、次に今何をすべきかを教える。

(2) マタ 5：23～24

Mat 5:23 ですから、祭壇の上にささげ物を献げようとしているときに、兄弟が自分を恨んでいることを思い出したなら、

Mat 5:24 ささげ物はそこに、祭壇の前に置き、行って、まずあなたの兄弟と仲直りをしなさい。それから戻って、そのささげ物を献げなさい。

①ほかの信者との分裂があれば、主イエスとの交わりを楽しむことができない。

②このことを意識しながら、パウロはコリント教会の分裂の問題を取り上げる。

2. 1 ヨハ 1：3～4

1Jn 1:3 私たちが見たこと、聞いたことを、あなたがたにも伝えます。あなたがたも私たちと交わりを持つようになるためです。私たちの交わりとは、御父また御子イエス・キリストとの交わりです。

1Jn 1:4 これらのことを書き送るのは、私たちの喜びが満ちあふれるためです。

(1) ヨハネが手紙を書く理由は、交わりのためである。

(2) 信者同士の交わりは、御父また御子イエス・キリストとの交わりである。

(3) 交わりは、すべての人に喜びをもたらす。

(4) 信者が喜んでいるのを見るのは、ヨハネにとって喜びであった。

コリント人への手紙第一　3 回
分裂という現実
1：10～17

はじめに

1. 文脈の確認
   (1) イントロダクション（1：1～9）
      ①あいさつ（1：1～3）
      ②感謝の祈り（1：4～9）
   (2) 教会内の分裂（1：10～4：21）
      ①分裂という現実（1：10～17）
      ②分裂の原因（1：18～4：5）
         ＊福音のメッセージの誤解（1：18～3：4）
         ＊奉仕の誤解（3：5～4：5）
      ③分裂の問題の解決法（4：6～21）

2. 注目点
   (1) パウロは、真っ先に分裂の問題を取り上げる。
   (2) 分裂は、最も深刻な問題である。
   (3) 分裂の背後には、神学的な要因が潜んでいる。
   (4) パウロは、神学的な要因を正そうとする。

3. アウトライン
   (1) クロエの家の者からの情報（10～12 節）
   (2) パウロの質問（13 節）
   (3) パウロのバプテスマ（14～16 節）
   (4) パウロの奉仕（17 節）

4. 結論
   (1) キリスト教の勝利主義
   (2) 分派の原因

教会内の分裂という現実について学ぶ。

Ⅰ．クロエの家の者からの情報（10～12 節）

1. 10 節

1Co 1:10 さて、兄弟たち、私たちの主イエス・キリストの名によって、あなたがたにお願いします。どうか皆が語ることを一つにして、仲間割れせず、同じ心、同じ考えで一致してください。

(1)「私たちの主イエス・キリストの名によって」

①最初の 10 節で、「キリスト」という名が 10 回も出てくる。

＊キリスト、イエス・キリスト、キリスト･イエス

②パウロは、コリントの信者の目をキリストに向けさせようとしている。

③自分の教えが最高の権威（キリスト）から出ていることを示そうとしている。

④パウロは、主にある兄弟として、コリントの兄弟たちにお願いしている。

(2)「仲間割れせず、同じ心、同じ考えで一致してください」

①パウロは、教会の問題の背後に神学的な要因があることを見抜いている。

②信者たちは、キリストよりも人間を高く上げていた。

③キリストの名を高く上げることが、一致のための方法である。

④信者がキリストの心を持つなら、一致できるようになる。

2. 11 節

1Co 1:11 私の兄弟たち。実は、あなたがたの間に争いがあると、クロエの家の者から知らされました。

(1) パウロが聞いた情報

①情報源は、クロエの家の者（複数）である。

②クロエという婦人が誰なのかは、分からない。

③彼女は、ビジネスウーマンで、複数のしもべ（奴隷）を所有していた。

④しもべたちは、コリントを訪問し、エペソに戻って来た。

⑤彼らは、コリント教会の現状をパウロに報告した。手紙も持ち帰った。

(2) パウロは、情報源を明示した。

①この情報は、ゴシップ（うわさ話）ではない。

②ここには、私たちへの教訓がある。

3. 12 節

1Co 1:12 あなたがたはそれぞれ、「私はパウロにつく」「私はアポロに」「私はケファに」「私はキリストに」と言っているとのことです。

(1) 4 つのグループが存在していた。

①パウロ派

＊パウロは、コリントで 18 か月奉仕をした教会の創立者である。

②アポロ派

＊アポロは、雄弁な弁証家である。

＊特に、ユダヤ人伝道に優れていた。

③ケファ（ペテロ）派

＊ペテロがコリントを訪問したという記録はない。

＊ペテロはユダヤ人に対する使徒の筆頭である。

＊初期のクリスチャン、特にユダヤ人信者はペテロを崇拝した。

④キリスト派

＊彼らは、人間のリーダーにではなく、キリストについた。

＊彼らは、霊的エリートという自己認識を持っていた。

＊彼らもまた、教会内で分派を形成していた。

Ⅱ．パウロの質問（13 節）

1．13 節

1Co 1:13 キリストが分割されたのですか。パウロがあなたがたのために十字架につけられたのですか。あなたがたはパウロの名によってバプテスマを受けたのですか。

(1) キリスト派に対する質問

①キリストが分割されたのか。

＊キリスト派の存在は、キリストのからだなる教会を分割する行為である。

(2) パウロ派に対する質問

①パウロがあなたがたのために十字架につけられたのか。

＊パウロは、十字架の重要性を強調している。

＊キリスト以上にパウロをあがめるのは、重大な誤りである。

②パウロの名によってバプテスマを受けたのか。

＊パウロは、水のバプテスマを重視した。

＊バプテスマは、キリストとの一体化を表明する聖礼典である。

＊ロマ 6：3〜4

Rom 6:3 それとも、あなたがたは知らないのですか。キリスト・イエスにつくバプテスマを受けた私たちはみな、その死にあずかるバプテスマを受けたのではありませんか。

Rom 6:4 私たちは、キリストの死にあずかるバプテスマによって、キリストとともに葬られたのです。それは、ちょうどキリストが御父の栄光によって死者の中からよみがえられたように、私たちも、新しいいのちに歩むためです。

Ⅲ．パウロのバプテスマ（14～16 節）

1. 14 節

1Co 1:14 私は神に感謝しています。私はクリスポとガイオのほか、あなたがたのだれにもバプテスマを授けませんでした。

(1) パウロは、神に感謝している。

①福音を信じてキリストに信頼すれば、その人は救われる。

②バプテスマは救いの条件ではないので、少数の者の洗礼しか行わなかった。

③パウロは福音を宣べ伝えたが、バプテスマは他の人に委ねた。

④分派のことを考えると、少数者にしか洗礼を授けなかったことを感謝している。

(2) クリスポとガイオ（使 18：7～8）

Act 18:7 そして、そこを去って、ティティオ・ユストという名の、神を敬う人の家に行った。その家は会堂の隣にあった。

Act 18:8 会堂司クリスポは、家族全員とともに主を信じた。また、多くのコリント人も聞いて信じ、バプテスマを受けた。

①クリスポ

＊クリスポは、会堂司である。

＊家族全員が信者になった。

②ガイオ

＊ティティオ・ユストと同一人物であろう。

＊神を敬う異邦人で、その家は会堂の隣にあった。

2. 15 節

1Co 1:15 ですから、あなたがたが私の名によってバプテスマを受けたとは、だれも言えないのです。

(1) 信者の関心をキリストに向けさせるために、バプテスマを行うことを控えた。

①そうすることで、信者がパウロの弟子になる危険性を避けたのである。

(2) キリストの名によるバプテスマによって、信者はキリストの弟子となる。

①司式者がパウロであっても、誰かほかの人であっても、結果は変わらない。

②この点では、パウロはほかのキリストの弟子と同じである。

3. 16 節

1Co 1:16 もっとも、ステファナの家の者たちにもバプテスマを授けましたが、そのほかにはだれにも授けた覚えはありません。

(1) ステファナの家の者たち

①パウロは、記録を取っていないので、誰に洗礼を授けたかを覚えていない。

②書き進むうちに、ステファナの家の者たちのことを思い出した。

③16：15

1Co 16:15 兄弟たちよ、あなたがたに勧めます。ご存じのとおり、ステファナの一家はアカイアの初穂であり、聖徒たちのために熱心に奉仕してくれました。

＊ステファナの一家は、アカイアの初穂となった（初期の信者）。

＊そこでパウロがバプテスマを授けた。

Ⅳ. パウロの奉仕（17 節）

1. 17 節

1Co 1:17 キリストが私を遣わされたのは、バプテスマを授けるためではなく、福音を、ことばの知恵によらずに宣べ伝えるためでした。これはキリストの十字架が空しくならないようにするためです。

(1) パウロの奉仕の内容

①「A ではなく、B である」は、B を強調するための構文である。

②洗礼は大宣教命令の一部であるが、それよりも福音を宣べ伝えるほうが重要。

(2) パウロの福音伝達

①「ことばの知恵によらずに宣べ伝えるため」

＊「ことばの知恵」は、ギリシア人が重視したものである。

＊パウロは、ギリシア人が称賛した雄弁という武器を用いなかった。

②「キリストの十字架がむなしくならないようにするため」

＊パウロは、雄弁家ではなく、伝道者である。

＊伝道者は、キリストの十字架を語る。

結論

1. キリスト教の勝利主義

(1) 分派は、勝利主義の一形態である。

①分派は、自分の派が他の人たちよりも上であるという認識から生まれる。

②分派は、十字架の神学ではなく、偽りの勝利主義に立っている。

(2) クリスチャンは、罪とその結果に勝利したと考えるのが勝利主義である。

①罪に勝利したので、迫害、苦難、人間的な限界などから解放されている。

②解放を体験していないなら、それは不信仰のゆえである。

(3) 勝利主義の本質は、終末論の強調にある。

①勝利主義は、終末時代に成就する祝福を今の時代に引き寄せている。
②繁栄の神学は、現代のキリスト教の勝利主義である。
③今の時代は、聖化の道を歩む時代である。
④また、キリストとともに苦しむ時代である。

2. 分派の原因

(1) 分派の原因は、どの説教者の話法を好むかにある。
①パウロ、アポロ、ペテロ、キリストそれぞれが、異なった話法を用いた。
②どの話法に惹かれるかによって、どの分派に属するかが決まる。

(2) パウロは、コリントの信者は肉の目でものごとを判断していると指摘する。
①3：3

1Co 3:3 あなたがたは、まだ肉の人だからです。あなたがたの間にはねたみや争いがあるのですから、あなたがたは肉の人であり、ただの人として歩んでいることにならないでしょうか。

(3) パウロが強調したのは、話法ではなく、メッセージの内容である。
①説教者が語るのは、十字架のメッセージである。
②説教者の力は、十字架のメッセージから出てくるものである。

(4) 私たちには、本物を見分けるための霊的な目と耳が必要である。

コリント人への手紙第一　4 回
分裂の原因（1）　―福音の愚かさ―
1：18～2：5

はじめに

1. 文脈の確認
   (1) イントロダクション（1：1～9）
   (2) 教会内の分裂（1：10～4：21）
      ①分裂という現実（1：10～17）
      ②分裂の原因（1：18～4：5）
         ＊福音のメッセージの誤解（1：18～3：4）
            ・福音の愚かさ（1：18～2：5）
            ・神の知恵の啓示（2：6～16）
            ・肉に属する人（3：1～4）
         ＊奉仕の誤解（3：5～4：5）
      ③分裂の問題の解決法（4：6～21）

2. 注目点：3 つの主要な教え
   (1) 福音の愚かさ（1：18～2：5）
      ①十字架につけられたキリスト
   (2) 教会の本質（12：4～13：13）
      ①御霊の賜物の種類と目的
   (3) 死者の復活（15 章）
      ①死者の復活はないとの主張に対する反論

3. アウトライン：福音の愚かさ（1：18～2：5）
   (1) 十字架のことばの愚かさ（18～25 節）
   (2) 信者の選びの愚かさ（26～31 節）
   (3) 宣教の愚かさ（2 章 1～5 節）

4. 結論：福音の伝達
   (1) 誰が
   (2) 何を
   (3) どういう方法で

福音の愚かさについて学ぶ。

Ⅰ．十字架のことばの愚かさ（18～25 節）

1. 18～19 節

1Co 1:18 十字架のことばは、滅びる者たちには愚かであっても、救われる私たちには神の力です。

1Co 1:19 「わたしは知恵ある者の知恵を滅ぼし、／悟りある者の悟りを消し去る」／と書いてあるからです。

(1)「十字架のことば」

①キリストが罪人の身代わりとして呪われた死を遂げられたというメッセージ

②ギリシア人にとっては、十字架は無力さと屈辱の象徴である。

③ユダヤ人にとっては、十字架は神の呪いの象徴である。

(2) 十字架のメッセージは、人類を 2 分する。

①滅びる者たちには愚かである。

②救われる者たちには神の力である。

③その中間の人はいない。

(3) パウロは、イザ 29：14 を引用する。

Isa 29:14 それゆえ、見よ、／わたしはこの民に再び、不思議なこと、／驚くべきことをする。／この民の知恵ある者の知恵は滅び、／悟りある者の悟りは隠される。」

①神の方法は、常に、人間の知恵の愚かさを暴露するものである。

2. 20～21 節

1Co 1:20 知恵ある者はどこにいるのですか。学者はどこにいるのですか。この世の論客はどこにいるのですか。神は、この世の知恵を愚かなものにされたではありませんか。

1Co 1:21 神の知恵により、この世は自分の知恵によって神を知ることがありませんでした。それゆえ神は、宣教のことばの愚かさを通して、信じる者を救うことにされたのです。

(1) 当時、知恵を誇っていた人が 3 種類いた。

①「知恵ある者」とは、哲学に通じ、世界観を論じることのできる人々。

②「学者」（律法学者）とは、旧約聖書の知識を誇っていた人々。

③「この世の論客」とは、それ以外の論争好きな人々。

(2) しかし神は、「この世の知恵」を愚かなものとされた。

①「この世の知恵」は「人の知恵」であり、「神の知恵」とは対極にある。

②「神の知恵」は、神が啓示された知恵である。

③神は、「宣教のことばの愚かさを通して」、人々を救うことにされた。
④救われるのは、「信じる者」である。
⑤救いの条件は、信仰である。

3. 22～25 節

1Co 1:22 ユダヤ人はしるしを要求し、ギリシア人は知恵を追求します。
1Co 1:23 しかし、私たちは十字架につけられたキリストを宣べ伝えます。ユダヤ人にとってはつまずき、異邦人にとっては愚かなことですが、
1Co 1:24 ユダヤ人であってもギリシア人であっても、召された者たちにとっては、神の力、神の知恵であるキリストです。
1Co 1:25 神の愚かさは人よりも賢く、神の弱さは人よりも強いからです。

(1) ユダヤ人は、しるしを要求する。
①「しるし」とは、イエスがメシアであるということを証明するものである。
②もしイエスがメシアなら、すでに地上に神の国が成就しているはずである。
③しかし、イエスは十字架につけられて死んだ。
④十字架は、神の呪いのしるしである（申 21：23、ガラ 3：13）。
⑤十字架のメッセージは、ユダヤ人にとっては、「つまずき」となった。

(2) ギリシア人は、知恵を追求する。
①ここでは、ギリシア人と異邦人は、同義語である。
②罪がないのに、十字架刑で殺されるのは、愚かなことである。
③その愚か者が救世主であるというメッセージは、余りにも不条理である。
④コリントの信者たちが人間の知恵に惹かれる理由が、ここにある。
⑤十字架がキリスト教のシンボルになるのは、紀元 2～3 世紀のことである。

(3) しかし、「召された者たちにとっては」、キリストは神の力、神の知恵である。
①パウロは、「十字架につけられたキリスト」を宣べ伝えた。
②「神の愚かさは人よりも賢く、神の弱さは人よりも強い」からである。

Ⅱ．信者の選びの愚かさ（26～31 節）

1. 26 節

1Co 1:26 兄弟たち、自分たちの召しのことを考えてみなさい。人間的に見れば知者は多くはなく、力ある者も多くはなく、身分の高い者も多くはありません。

(1) 十字架のことばの愚かさから、コリントの信者の愚かさに移行する。
①信者として召された者の大半が、この世から見れば愚かな者である。

②知者も、力ある者も、身分の高い者も多くはない。
③信者の多くが、奴隷か、解放された自由人であった。

2. 27～28 節

1Co 1:27 しかし神は、知恵ある者を恥じ入らせるために、この世の愚かな者を選び、強い者を恥じ入らせるために、この世の弱い者を選ばれました。
1Co 1:28 有るものを無いものとするために、この世の取るに足りない者や見下されている者、すなわち無に等しい者を神は選ばれたのです。

(1) 神の選びの不思議
①神は、知恵ある者を恥じ入らせるために、この世の愚かな者を選ばれた。
②神は強い者を恥じ入らせるために、この世の弱い者を選ばれた。
③有るもの（この世が評価するもの）を無いものとするために、無に等しい者（この世の愚か者）を選ばれた。

(2) この世の有力者は救われないという意味ではない。
①彼らも、信仰によって救われる。
②神の栄光は、この世の愚かな者の選びの中に現れているという意味である。

3. 29 節

1Co 1:29 肉なる者がだれも神の御前で誇ることがないようにするためです。

(1) 神は、ご自身の栄光のために、この方法を採用された、
①人は、神の御前で自分を誇ることはできない。
②さらに、自分が好む指導者たちを誇ることもできない。

4. 30～31 節

1Co 1:30 しかし、あなたがたは神によってキリスト・イエスのうちにあります。キリストは、私たちにとって神からの知恵、すなわち、義と聖と贖いになられました。
1Co 1:31 「誇る者は主を誇れ」と書いてあるとおりになるためです。

(1) 私たちが誇るべきは、人間ではなく、神ご自身である。
①キリストは、神からの知恵となられた。
②キリストは、私たちの義となられた（義認）。
③キリストは、私たちの聖となられた（聖化）。
④キリストは、私たちの贖いとなられた（栄化）。

(2)「誇る者は主を誇れ」

①エレ 9：24

Jer 9:24 誇る者は、ただ、これを誇れ。／悟りを得て、わたしを知っていることを。／わたしは【主】であり、／地に恵みと公正と正義を行う者であるからだ。／まことに、わたしはこれらのことを喜ぶ。／――【主】のことば。』」

②無力な人間を誇るのは、愚かなことである。

Ⅲ．宣教の愚かさ（2 章 1～5 節）

1．1～2 節

1Co 2:1 兄弟たち。私があなたがたのところに行ったとき、私は、すぐれたことばや知恵を用いて神の奥義を宣べ伝えることはしませんでした。

1Co 2:2 なぜなら私は、あなたがたの間で、イエス・キリスト、しかも十字架につけられたキリストのほかには、何も知るまいと決心していたからです。

（1）十字架のことばの愚かさ、信者の愚かさ、そして、宣教の愚かさ

①パウロのコリント宣教は、愚かな方法で行われた。

②すぐれたことばや知恵を用いなかった。

③「神の奥義」とは、イエス・キリストの福音である。

（2）パウロは、十字架につけられたキリストだけを伝えた。

①ガラ 3：1

Gal 3:1 ああ、愚かなガラテヤ人。十字架につけられたイエス・キリストが、目の前に描き出されたというのに、だれがあなたがたを惑わしたのですか。

（3）注意すべき点

①説教者の学び、準備、努力などを否定しているわけではない。

②なんと素晴らしい説教者だろうかと言われたら、失敗である。

③なんと素晴らしい救い主だろうかと言われたら、成功である。

2．3 節

1Co 2:3 あなたがたのところに行ったときの私は、弱く、恐れおののいていました。

（1）パウロは、無力感を覚えていた。

①アテネでの宣教結果に失望していた。

②使 18：9～10

Act 18:9 ある夜、主は幻によってパウロに言われた。「恐れないで、語り続けなさい。黙ってはいけない。

Act 18:10 わたしがあなたとともにいるので、あなたを襲って危害を加える者はいない。この

町には、わたしの民がたくさんいるのだから。」

3. 4〜5 節

1Co 2:4 そして、私のことばと私の宣教は、説得力のある知恵のことばによるものではなく、御霊と御力の現れによるものでした。

1Co 2:5 それは、あなたがたの信仰が、人間の知恵によらず、神の力によるものとなるためだったのです。

(1) パウロの宣教は、説得力のある知恵のことばによるものではなかった。

①パウロは、説教者の努力、準備、賜物の行使を否定しているわけではない。

②説教者は、自分の力を信頼してはならないということである。

③福音を聞いた人の心を開くのは、御霊の役割である。

(2) コリントの信者たちは、人間の知恵ではなく、神の力によって救われた。

①新生体験は、超自然的な体験である。

結論：福音の伝達

1. 誰が

(1)「この世の愚かな者」が、伝達者になる。

(2) 彼らは、「十字架のことば」を信じて、救われた人たちである。

(3) そして、それは私たちのことでもある。

(4) 愚かな者を用いるのは、旧約聖書から一貫して続いている神の方法である。

2. 何を

(1) キリストは罪人の身代わりとして呪われた死を遂げられたというメッセージ

(2) ギリシア人にとっては、十字架は無力さと屈辱の象徴である。

(3) ユダヤ人にとっては、十字架は神の呪いの象徴である。

(4)「十字架のことば」に何かを付加することは許されない。

3. どういう方法で

(1) 率直に、聖霊を信頼して、福音を伝える。

(2) パウロは、説得力のある知恵のことばを用いなかった。

(例話) 私に伝道してくれた大学時代の後輩

(3) すべてが神から発し、神に至る。

(4) 人間的なものを誇る余地は、全くない。

コリント人への手紙第一　5 回
分裂の原因（2）―神の知恵の啓示―
2：6〜3：4

はじめに

1. 文脈の確認
   (1) イントロダクション（1：1〜9）
   (2) 教会内の分裂（1：10〜4：21）
      ①分裂という現実（1：10〜17）
      ②分裂の原因（1：18〜4：5）
         ＊福音のメッセージの誤解（1：18〜3：4）
            ・福音の愚かさ（1：18〜2：5）
            ・神の知恵の啓示（2：6〜16）
            ・肉に属する人（3：1〜4）
         ＊奉仕の誤解（3：5〜4：5）
      ③分裂の問題の解決法（4：6〜21）

2. アウトライン：福音のメッセージの誤解
   (1) 福音の愚かさ（1：18〜2：5）
   (2) 神の知恵の啓示（2：6〜16）
   (3) 肉に属する人（3：1〜4）

3. 結論
   (1) 3 種類の聖霊の働き
   (2) 4 種類の人間

3 種類の聖霊の働きと 4 種類の人間ついて学ぶ。

Ⅱ．神の知恵の啓示（2：6〜16）

1. 6〜7 節

1Co 2:6 しかし私たちは、成熟した人たちの間では知恵を語ります。この知恵は、この世の知恵でも、この世の過ぎ去って行く支配者たちの知恵でもありません。

1Co 2:7 私たちは、奥義のうちにある、隠された神の知恵を語るのであって、その知恵は、神が私たちの栄光のために、世界の始まる前から定めておられたものです。

(1) パウロは、4〜5 節で、「人間の知恵」を否定した。
   ①しかし、あらゆる種類の知恵が否定されるわけではない。

②福音は単純であるが、その中には、深遠な神の知恵が隠されている。

(2) パウロは、「成熟した人たちの間では」知恵を語るという。
①成熟した人たちとは、霊的に成熟したクリスチャンである。
②彼らは、「御霊を受けている人」(2：15) である。

(3) パウロが語る神の知恵
①この世の知恵ではない。
②この世の過ぎ去って行く支配者たちの知恵でもない。
③奥義（福音）のうちにある、隠された知恵である。
④私たちの栄光のために、世界の始まる前から神が定めておられたものである。

(4) エペ 3：2～12
①この聖句は、世界の始まる前から神が定めていた計画を啓示している。
②エペソ教会の信者たちは霊的に成熟していた。
③コリントの信者たちは、霊的幼子であった。
④神の計画のゴールは聖徒たちの栄化であるが、ここでは詳細は語られない。

2. 8 節

1Co 2:8 この知恵を、この世の支配者たちは、だれ一人知りませんでした。もし知っていたら、栄光の主を十字架につけはしなかったでしょう。

(1) この世の支配者たちは、神の知恵を知らなかった。
①政治的支配者
②宗教的支配者
③この世の神（悪魔）

(2) もし知っていたら、栄光の主を十字架につけはしなかった。
①使 3：17～18、4：25～28
②「栄光の主」とは、栄光を属性とする主イエスのことである。
③その方を十字架につけるなら、滅びが待っている。

3. 9～10 節

1Co 2:9 しかし、このことは、／「目が見たことのないもの、／耳が聞いたことのないもの、／人の心に思い浮かんだことがないものを、／神は、神を愛する者たちに備えてくださった」／と書いてあるとおりでした。

1Co 2:10 それを、神は私たちに御霊によって啓示してくださいました。御霊はすべてのことを、神の深みさえも探られるからです。

（1）イザ 64：4 からの引用

①神は、神を愛する者たちのために、想像もつかないような祝福を用意された。

②目、耳、心は、地上の事象を知覚するための手段である。

③これだけでは、神の真理を受け入れることはできない。

（2）神の真理を受け入れるためには、御霊の助けが必要である。

①神は、御霊によって神の真理を私たち（使徒たち）に啓示された。

②御霊は、父なる神の思いを読み取ることができる。

4. 11〜12 節

1Co 2:11 人間のことは、その人のうちにある人間の霊のほかに、いったいだれが知っているでしょう。同じように、神のことは、神の霊のほかにはだれも知りません。

1Co 2:12 しかし私たちは、この世の霊を受けたのではなく、神からの霊を受けました。それで私たちは、神が私たちに恵みとして与えてくださったものを知るのです。

（1）人間のことは、本人（その人のうちにある霊）だけが知っている。

①人間は、他人に関連したことを知ることができない。

②ましてや、神に関連したことを知るのは不可能である。

（2）神のことは、神の霊だけが知っている。

①神の真理は、不信者には理解不可能なことである。

②福音を信じて救われた者は、この世の霊を受けたのではなく、聖霊を受けた。

③その結果、神が私たちに恵みとして与えてくださったものを知るようになった。

④ロマ 8：9

Rom 8:9 しかし、もし神の御霊があなたがたのうちに住んでおられるなら、あなたがたは肉のうちにではなく、御霊のうちにいるのです。もし、キリストの御霊を持っていない人がいれば、その人はキリストのものではありません。

5. 13〜14 節

1Co 2:13 それについて語るのに、私たちは人間の知恵によって教えられたことばではなく、御霊に教えられたことばを用います。その御霊のことばによって御霊のことを説明するのです。

1Co 2:14 生まれながらの人間は、神の御霊に属することを受け入れません。それらはその人には愚かなことであり、理解することができないのです。御霊に属することは御霊によって

判断するものだからです。

(1)「私たち」とは、パウロと他の使徒たちである。

①神の真理を説明するのに、人間の知恵から生まれたことばを用いない。

②御霊に教えられたことばを用いる。

③使徒たちは、御霊の守りと導きによって、神の真理を説明する。

(2)「生まれながらの人間」

①不信者は、神の御霊に属することを受け入れない。

②それらは、その人には愚かなことである。

③また、理解することができない。

④不信者が福音を信じるのは、聖霊による啓明があるからである。

6. 15 節

1Co 2:15 御霊を受けている人はすべてのことを判断しますが、その人自身はだれによっても判断されません。

(1) 信者は、すべての霊的事項を判断する（見分ける）ことができる。

①世界観が変わる。

②人生の目標が変わる。

③価値観が変わる。

④好みが変わる。

(2) 信者は、不信者からは理解されない。

①信者は、この世にあっては変わり者である。

②信者を判断するのは、神だけである。

③それゆえ、信者は、神に対して説明責任を負っている。

7. 16 節

1Co 2:16 「だれが主の心を知り、主に助言するというのですか。」しかし、私たちはキリストの心を持っています。

(1) イザ 40：13 からの引用

①これは、修辞的疑問文である。答える必要はない。

②主の心は驚嘆すべきもので、生まれながらの人間には理解できない。

(2) しかし、信者は主の心をある程度は理解できるようになっている。

①なぜなら、キリストの心を持っているからである。

②信者は、御霊に属しているという意味である。

Ⅲ．肉に属する人（3：1〜4 節）

1．1 節

1Co 3:1 兄弟たち。私はあなたがたに、御霊に属する人に対するようには語ることができずに、肉に属する人、キリストにある幼子に対するように語りました。

(1)「兄弟たち」「あなたがた」

①パウロは、特定の分派にではなく、教会全体に語っている、

(2) コリントの信者たちは、全員がキリストにある幼子である。

①信者になりたての人は、霊的幼子である。

②年数が経っているのに、霊的幼子の状態にとどまっているのは問題である。

③パウロは、霊的成人に対するようにではなく、霊的幼子に対するように語った。

2．2〜3 節

1Co 3:2 私はあなたがたには乳を飲ませ、固い食物を与えませんでした。あなたがたには、まだ無理だったからです。実は、今でもまだ無理なのです。

1Co 3:3 あなたがたは、まだ肉の人だからです。あなたがたの間にはねたみや争いがあるのですから、あなたがたは肉の人であり、ただの人として歩んでいることにならないでしょうか。

(1) パウロがコリントにいた頃、信者たちは新生してから日が浅かった。

①パウロは、彼らに乳を飲ませ、固い食物を与えなかった。

②つまり、信仰の初歩的なことだけを教えた。

③固い食物（より深い教え）は、まだ無理だった。

(2) 実は、今でも無理である。

①ねたみや争いがあるのは、彼らが「肉の人」である証拠である。

3．4 節

1Co 3:4 ある人は「私はパウロにつく」と言い、別の人は「私はアポロに」と言っているのであれば、あなたがたは、ただの人ではありませんか。

(1) 人間の指導者をあがめるのは、人間の知恵によるものである。

①キリストは、謙遜の道を歩み、次に、高く上げられた。

②キリストの弟子には、同じことが期待されている。

③高く上げられる（栄化される）ために、謙遜になる必要がある。

結論

1. 3 種類の聖霊の働き

(1) 啓示

①聖霊は、神の御心の深みにある計画（福音）を使徒たちに啓示された。

②「私たちに啓示された」（10 節）と一人称複数形が使われている。

③これは、使徒たちの間には共通の福音理解があることを示している。

(2) 霊感

①啓示された内容を記録する際に、聖霊の守りが与えられた。

②聖書を「神のことば」として信じる理由は、霊感にある。

(3) 啓明

①啓明とは、聖書を読む際に聖霊から与えられる理解力や悟りのことである。

②「御霊に属することは御霊によって判断するものだからです」（14 節）

③生まれながらの人間は、啓明に頼るということがない。

④聖霊に導かれている人は、聖書から霊的な教訓や結論を導き出すことができる。

2. 4 種類の人間

(1) 生まれながらの人（2：14）

①霊的なことが理解できない未信者

②信者でない人は全員、「生まれながらの人」である。

(2) キリストにある幼子（3：1）

①クリスチャンになりたての人

②聖霊を受けているが、霊的に幼い状態にある。

③みことばの乳しか食することができない。

(3) 肉に属する人（3：3）

①御霊の導きではなく、人間の知恵に導かれている人

②堅い食物（神の計画に関するより深い真理）を食するのが困難な人である。

(4) 御霊に属する人（3：1）

①聖霊に導かれて歩む人

②霊的に成熟した人である。

コリント人への手紙第一　6 回
分裂の原因（3）―神のしもべの役割―
3：5～17

はじめに

1. 文脈の確認
   (1) イントロダクション（1：1～9）
   (2) 教会内の分裂（1：10～4：21）
      ①分裂という現実（1：10～17）
      ②分裂の原因（1：18～4：5）
         ＊福音のメッセージの誤解（1：18～3：4）
         ＊奉仕の誤解（3：5～4：5）
            ・神のしもべの役割（3 ：5～17）
            ・この世の知恵（3；18～23）
            ・パウロの奉仕（4：1～5）
      ③分裂の問題の解決法（4：6～21）

2. 注目すべき点
   (1) パウロは、分派の背後に潜む誤解を指摘する。
   (2) ここでは、教会の本質に関する誤解を解こうとする。

3. アウトライン：神のしもべの役割（3：5～17）
   (1) 神のために働く同労者（5～9 節）
   (2) 地域教会を建てる者たち（10～15 節）
   (3) 地域教会を破壊することへの警告（16～17 節）

4. 結論
   (1) 神の評価
   (2) 神が与える報い
   (3) 神に仕える動機

神のしもべの役割について学ぶ。

Ⅰ．神のために働く同労者（5～9 節）

1. 5～6 節

1Co 3:5 アポロとは何なのでしょう。パウロとは何なのでしょう。あなたがたが信じるために

用いられた奉仕者であって、主がそれぞれに与えられたとおりのことをしたのです。
1Co 3:6 私が植えて、アポロが水を注ぎました。しかし、成長させたのは神です。

(1) コリントの信者たちは、「肉に属する人」である。
①コリント教会には、ねたみや争いがあった。
②これは、彼らが御霊に属する人になっていないという証拠である。
③彼らは、指導者たちを偶像化していた。
④「私はパウロにつく」、「私はアポロに」などと言っていた。

(2) 神が立てた指導者たちは、主の働きのために協力している。
①パウロも、アポロも、ペテロも、自分に委ねられた領域で奉仕をしている。
②彼らを導いているのは、聖霊である。
③主役は、神である。
「**私が植えて、アポロが水を注ぎました。しかし、成長させたのは神です**」

2. 7～8 節

1Co 3:7 ですから、大切なのは、植える者でも水を注ぐ者でもなく、成長させてくださる神です。
1Co 3:8 植える者と水を注ぐ者は一つとなって働き、それぞれ自分の労苦に応じて自分の報酬を受けるのです。

(1) 農業的な比ゆが語られる。
①植えたり、水を注いだりするのは、神のしもべたちの仕事である。
②それゆえ、「私たちはみな神に仕えている」と告白すべきである。
③称賛を受けるにふさわしいのは、神だけである。

(2) 植える者と水を注ぐ者は一つとなって働く。
①両者の目的は、同じである。
②その役割に忠実であったかどうかで、神からの報酬が決まる。
③各人は、働きの実によってではなく、労苦に応じて自分の報酬を受ける。

3. 9 節

1Co 3:9 私たちは神のために働く同労者であり、あなたがたは神の畑、神の建物です。

(1)「**私たち**」とは、パウロとアポロである。
①2 コリ 6：1 では、信者はみな同労者である。

(2)「**あなたがた**」とは、コリント教会である。

①教会は、「**神の畑**」である。
②教会は、「**神の建物**」である。
③パウロは、農業的な比ゆから建築的な比ゆに移行する。
④9 節は、テーマを移行させるための聖句である。
⑤神の啓示をことばで表現する際に、聖霊による守りがある（霊感）。

Ⅱ．地域教会を建てる者たち（10～15 節）

1. 10～11 節

1Co 3:10 私は、自分に与えられた神の恵みによって、賢い建築家のように土台を据えました。ほかの人がその上に家を建てるのです。しかし、どのように建てるかは、それぞれが注意しなければなりません。

1Co 3:11 だれも、すでに据えられている土台以外の物を据えることはできないからです。その土台とはイエス・キリストです。

(1) この箇所は、クリスチャン生活の構築について教えているのではない。
①適用としては間違っていないが、それが正しい解釈とは言えない。

(2) パウロは、自分を賢い建築家にたとえて教会建設の秘訣を披露している。
①神の恵みによって、伝道が可能になった（神の側の責務）。
②賢い建築家のようにコリント教会の基礎を築いた（人間の側の責務）。
③教会の基礎とは、十字架につけられたキリストである。
④その上に、ほかの人が壁を築いたり、屋根を載せたりしている。
＊パウロの後に、コリントにやって来た教師たちのことである。
⑤だれも、この土台以外の物を据えることはできない。
＊その土台とは、イエス・キリストである。

(3) エペ 2：20

Eph 2:20 使徒たちや預言者たちという土台の上に建てられていて、キリスト・イエスご自身がその要の石です。

①使徒たちや預言者たちが土台というのは、二義的な意味におけることである。
②要の石であるキリスト・イエスこそ、一義的な意味における土台である。

2. 12～13 節

1Co 3:12 だれかがこの土台の上に、金、銀、宝石、木、草、藁で家を建てると、

1Co 3:13 それぞれの働きは明らかになります。「その日」がそれを明るみに出すのです。その日は火とともに現れ、この火が、それぞれの働きがどのようなものかを試すからです。

(1) 土台の次に大切なのは、建築材料である。

①エルサレムの神殿も、アテネやコリントの異教の神殿も、金、銀、宝石などをふんだんに使って建てられていた。

②庶民の家は、木、草、藁などで建てられていた。

＊草や藁は、壁や屋根の材料である。

(2)「**金、銀、宝石**」

①宝石とは、堅固な建築材料のことであろう。

②これは、永続性のある健全な教理のことである。

(3)「**木、草、藁**」

①これは、永続性のない教え、あるいは、人間の知恵から出た教えである。

(4)「**その日**」とは、キリストの御座の裁きの日である。

①2 コリ 5：10

2Co 5:10 私たちはみな、善であれ悪であれ、それぞれ肉体においてした行いに応じて報いを受けるために、キリストのさばきの座の前に現れなければならないのです。

②神の裁きの火は、各人の働きの質を試す。

3. 14～15 節

1Co 3:14 だれかの建てた建物が残れば、その人は報いを受けます。

1Co 3:15 だれかの建てた建物が焼ければ、その人は損害を受けますが、その人自身は火の中をくぐるようにして助かります。

(1) 各人の働きが明瞭になる日がやがてくる。

①キリストを土台として「金、銀、宝石」で建てた教会は、残る。

②その時、その建築家は神からの報いを受ける。

③「木、草、藁」を使って建てた教会は、焼ける。

④その建築家は、神からの報いを受けることができない。

(2) これは、罪人の裁きとは異なる。

①その建築家がイエスを信じているなら、その人自身は救われる。

②「**火の中をくぐるようにして助かります**」。

③やっとのことで助かるという意味である。

Ⅲ. 地域教会を破壊することへの警告（16～17 節）

1. 16 節

1Co 3:16 あなたがたは、自分が神の宮であり、神の御霊が自分のうちに住んでおられることを知らないのですか。

(1)「**あなたがたは、……知らないのですか**」

①本書には、この問いかけが 10 回出てくる。

②それに続いて、否定できない真理が語られる。

(2)「**神の宮**」とは何か。

①信者のからだは、聖霊の宮である。

＊6：19

1Co 6:19 あなたがたは知らないのですか。あなたがたのからだは、あなたがたのうちにおられる、神から受けた聖霊の宮であり、あなたがたはもはや自分自身のものではありません。

＊しかし、ここでの「神の宮」とは、信者個人ではない。

②普遍的教会は、霊の家である。

＊エペ 2：19～22

＊1 ペテ 2：5

1Pe 2:5 あなたがた自身も生ける石として霊の家に築き上げられ、神に喜ばれる霊のいけにえをイエス・キリストを通して献げる、聖なる祭司となります。

＊しかし、ここでの「神の宮」とは、普遍的教会ではない。

(3) ここでの「神の宮」とは、コリント教会である。

①「あなたがた」は複数形であり、「神の宮」は単数形である。

②「神の宮」は集合名詞、つまり、地域教会である。

③地域教会のうちには、神の御霊が住んでおられる。

2. 17 節

1Co 3:17 もし、だれかが神の宮を壊すなら、神がその人を滅ぼされます。神の宮は聖なるものだからです。あなたがたは、その宮です。

(1) 地域教会を軽視し、破壊することへの強い警告が語られる。

①教会は、キリストのみからだである。

②教会を壊す（汚す）人は、神の裁き（訓練）を受ける。

③教会は、聖なる神の宮である。

④コリントの信者の集合体が、神の宮である。

(2) 16～17 節は、教会内の懲戒の必要性を予測している。

①懲戒のテーマは、5：1～13 に出てくる。

結論

1. 神の評価
   (1) 神が評価される教会を建てた者は、報いを受ける。
   (2) 神が評価しない教会を建てた者は、損害を受ける（報いがない）。
      ①その人は、火の中をくぐるようにして助かる（救いを失うことはない）。

2. 神が与える報い
   (1) 神に仕え、神をあがめる機会がより多く与えられる。
      ①マタ 25：14～30
      ②ルカ 19：11～27
   (2) 報いは、冠と表現される（献身した生涯を表す比ゆ的ことば）。

3. 神に仕える動機
   (1) 神への愛と感謝の表現
   (2) 隣人への愛の表現
   (3) 神に対する恐れ
   (4) 神から冠を受けるため
      ①9：25

1Co 9:25 競技をする人は、あらゆることについて節制します。彼らは朽ちる冠を受けるためにそうするのですが、私たちは朽ちない冠を受けるためにそうするのです。

コリント人への手紙第一　7 回
分裂の原因（4）―この世の知恵―
3：18〜4：5

はじめに

1. 文脈の確認
   (1) イントロダクション（1：1〜9）
   (2) 教会内の分裂（1：10〜4：21）
      ①分裂という現実（1：10〜17）
      ②分裂の原因（1：18〜4：5）
         ＊福音のメッセージの誤解（1：18〜3：4）
         ＊奉仕の誤解（3：5〜4：5）
            ・神のしもべの役割（3 ：5〜17）
            ・この世の知恵（3：18〜23）
            ・パウロの奉仕（4：1〜5）
      ③分裂の問題の解決法（4：6〜21）

2. アウトライン
   (1) この世の知恵（3：18〜23）
   (2) パウロの奉仕（4：1〜5）

4. 結論
   (1) 指導者と信者の関係
   (2) 教会内の秩序

この世の知恵とパウロの奉仕について学ぶ。

Ⅰ．この世の知恵（3：18〜23）

1. 18 節

1Co 3:18 だれも自分を欺いてはいけません。あなたがたの中に、自分はこの世で知恵のある者だと思う者がいたら、知恵のある者となるために愚かになりなさい。

(1) 再びパウロは、1：18〜25 で述べられた真理について語る。
   ①内容は、神の知恵とこの世の知恵の違いである。
   ②自分はこの世で知恵ある者だと思う者がいたら、その人は自分を欺いている。

(2) 知恵のある者となるためには、愚かになる必要がある。

①愚かになるとは、神の御前で自分がいかに愚かであるかを認めること。
②そして、啓示された神の知恵を受け入れること。
③その人は、神の知恵を身につけた真の知者となる。
④その人は、神の視点からものごとを見るようになる。

2. 19〜20節

1Co 3:19 なぜなら、この世の知恵は神の御前では愚かだからです。「神は知恵のある者を、彼ら自身の悪巧みによって捕らえる」と書かれており、
1Co 3:20 また、「主は、知恵のある者の思い計ることがいかに空しいかを、知っておられる」とも書かれています。

(1) 自らの教えに権威を与えるために、旧約聖書から2箇所引用する。
①ヨブ5：13
「神は知恵のある者を、彼ら自身の悪巧みによって捕らえる」
②詩94：11
「主は、知恵のある者の思い計ることがいかに空しいかを、知っておられる」

(2) 1：18

1Co 1:18 十字架のことばは、滅びる者たちには愚かであっても、救われる私たちには神の力です。

①知恵ある者は、十字架のことばを愚かだと考える。
②ここではその逆に、主は、知恵ある者の思い計ることはむなしいと判断される。

(3) 人間を誇る者は、未だにこの世の知恵に信頼しようとしている。
①そういう人は、自らの知恵によって、その身に裁きをもたらす。
②そういう人は、神の知恵に信頼することを学ぶ必要がある。

3. 21節

1Co 3:21 ですから、だれも人間を誇ってはいけません。すべては、あなたがたのものです。

(1)「**ですから**」
①ここから、結論に入る。
②すべては、クリスチャン（教会）のものである。
③神が計画されたことは、すべて私たちに祝福を与えるためのものである。
④そういう観点から人生を捉えると、分派がいかに愚かなことかが分かる。

(2)「**人間を誇ってはいけません**」

①説教者に関して個人的な好みがあることは、避けられない。
②しかし、それを分派に結び付けてはならない。
③好みでない説教者のメッセージが、最も必要なものである可能性がある。

4. 22〜23 節

1Co 3:22 パウロであれ、アポロであれ、ケファであれ、また世界であれ、いのちであれ、死であれ、また現在のものであれ、未来のものであれ、すべてはあなたがたのもの、
1Co 3:23 あなたがたはキリストのもの、キリストは神のものです。

(1) すべては、クリスチャンのものである。
①パウロも、アポロも、ペテロ（ケファ）も、すべて教会のために働いている。
＊彼らは、教会に祝福をもたらす神のしもべたちである。
＊彼らは、教会に与えられた賜物である。
②さらに、世界も、いのちも、死も、現在のものも、未来のものも、すべてクリスチャンのためのものである。
＊クリスチャンは世界を相続し、キリストとともに統治するようになる。
＊ロマ 8：38〜39
＊死は、クリスチャンを次の祝福に導く神の使いである。

(2) すべてがクリスチャンのものである理由
①クリスチャン（教会）は、キリストに属し、キリストのものである。
②キリストは、父なる神によって遣わされた救い主であり、神のものである。
③クリスチャンは、キリストにあって、すべてを持っている。

Ⅱ．パウロの奉仕（4：1〜5）

1. 1〜2 節

1Co 4:1 人は私たちをキリストのしもべ、神の奥義の管理者と考えるべきです。
1Co 4:2 その場合、管理者に要求されることは、忠実だと認められることです。

(1) パウロは、自分に関するコリントの信者たちの誤解を解く。
①指導者のモデルを提示し、それに倣うように教える。

(2) 使徒たちの特徴
①「**キリストのしもべ**」
＊自由人でありながら、喜んでキリストに仕える人
②「**神の奥義の管理者**」
＊啓示された福音の真理に混ぜ物をせず、そのまま他の人に伝える人

(2)「**神の奥義の管理者**」に要求される最も大切な資質は、忠実さである。

①福音とキリストに対して忠実であるということ

②忠実な管理者のイメージは、創 39：2〜19 のヨセフを見ればよく分かる。

2. 3〜4 節

1Co 4:3 しかし私にとって、あなたがたにさばかれたり、あるいは人間の法廷でさばかれたりすることは、非常に小さなことです。それどころか、私は自分で自分をさばくことさえしません。

1Co 4:4 私には、やましいことは少しもありませんが、だからといって、それで義と認められているわけではありません。私をさばく方は主です。

(1) パウロは、キリストに対する忠実さをもって信者たちに語りかけている。

①人に喜ばれることよりも、キリストに喜ばれることを第一に働いている。

②人間による判定は、彼にとっては小さなことである。

③コリントの信者たちが彼をどう評価するかは、大したことではない。

④さらに、自己評価さえも、彼にとってはもはや問題ではない。

⑤自分で考えてやましいことがなくても、人間の理解には限界がある。

⑥正しく裁かれるのは、主のみである。

3. 5 節

1Co 4:5 ですから、主が来られるまでは、何についても先走ってさばいてはいけません。主は、闇に隠れたことも明るみに出し、心の中のはかりごとも明らかにされます。そのときに、神からそれぞれの人に称賛が与えられるのです。

(1) ですから、主の再臨の日まで、先走った裁きをすべきではない。

①コリントの信者たちはパウロを裁いていたが、その姿勢は正しくない。

②2 コリ 5：10

2Co 5:10 私たちはみな、善であれ悪であれ、それぞれ肉体においてした行いに応じて報いを受けるために、キリストのさばきの座の前に現れなければならないのです。

③キリストの御座の裁きにおいて、すべてのことが明らかにされる。

結論

1. 指導者と信者の関係

(1) 指導者は、神のしもべである。

(2) 指導者は、信者のしもべではない。

(3) 指導者は、信者に終末論的な生き方を教え、その手本を示す。

①この世において称賛を受けることを願うべきではない。
②将来与えられる主からの称賛を待ち望むべきである。
③特に、老年になった指導者には重大な責任がある。

2. 教会内の秩序
(1) コリント教会には、無秩序という問題があった。
①キリスト以上に、キリストのしもべたちをあがめていた。
②御霊の賜物の行使に関して、御霊の導きに従っていなかった。
(2) パウロは、聖書的秩序を教えた（役割の違いである）。
①父は御子の上にいる。
②御子は男の上にいる。
③男は女の上にいる。
(3) クリスチャンは、キリストにあってすべてを持っている。

コリント人への手紙第一　8 回
分裂の問題の解決法
4：6～21

はじめに

1. 文脈の確認
   (1) イントロダクション（1：1～9）
   (2) 教会内の分裂（1：10～4：21）
      ①分裂という現実（1：10～17）
      ②分裂の原因（1：18～4：5）
      ③分裂の問題の解決法（4：6～21）

2. アウトライン
   (1) 誤った誇り（6～13 節）
   (2) 最後の訴えと勧め（14～21 節）

3. 注目すべき点
   (1) 皮肉や反語法などの修辞的手法が用いられる。
   (2) 分派の原因は、プライド（思い上がり）である。
   (3) 分派の解決法は、パウロを見習うことである。

4. 結論
   (1) 分派の原因
   (2) 分派の解決

分裂の問題の解決法について学ぶ。

Ⅰ．誤った誇り（6～13 節）

1. 6 節

1Co 4:6 兄弟たち。私はあなたがたのために、私自身とアポロに当てはめて、以上のことを述べてきました。それは、私たちの例から、「書かれていることを越えない」ことをあなたがたが学ぶため、そして、一方にくみし、他方に反対して思い上がることのないようにするためです。

(1) パウロは、種々の例話を用いてきた。
   ①農夫、建築家、しもべ、管理者
   ②次に出てくるのは、パウロとアポロを例に取った議論である。

(2)「**『書かれていることを越えない』ことをあなたがたが学ぶため**」

①聖書（この場合は旧約聖書）が教えていることを越えない。

②つまり、人間を過度に評価しないということである。

③特定の指導者をあがめ、他の指導者を拒否したりしないということである。

④1 人の人が、すべての真理を持っているわけではない。

⑤特定の指導者に付くのは、思いあがっている（高ぶっている）からである。

(3) パウロとアポロから学ぶ教訓

①パウロとアポロは、共通の目的のために働く同労者である。

②彼らは、人間（自分）を誇ることはしない。

③彼らの奉仕の姿勢から、キリストのしもべのあるべき姿を学ぶことができる。

④パウロとアポロを手本にするなら、分派の問題は解決する。

(4) 問題の原因は、ギリシア・ローマ的価値観である。

①謙遜は、奴隷の悲しむべき性質である。

②謙遜は、弱さのしるしであり、偉大な人物の特徴ではない。

③コリントの信者たちの問題は、高慢にある。

2. 7～8 節

1Co 4:7 いったいだれが、あなたをほかの人よりもすぐれていると認めるのですか。あなたには、何か、人からもらわなかったものがあるのですか。もしもらったのなら、なぜ、もらっていないかのように誇るのですか。

1Co 4:8 あなたがたは、もう満ち足りています。すでに豊かになっています。私たち抜きで王様になっています。いっそのこと、本当に王様になっていたらよかったのです。そうすれば、私たちもあなたがたとともに、王様になれたでしょうに。

(1) コリントの信者たちの高慢な姿

①彼らには、何か、人からもらわなかったものはない。

②にもかかわらず、彼らは、もらっていないかのように誇り高ぶっている。

③彼らを導いた使徒たちは謙遜に歩んでいるが、彼ら自身は傲慢になっている。

(2) パウロの皮肉（irony）と当てこすり（sarcasm）

①古代ギリシア・ローマ世界の対話では、皮肉や当てこすりは、よく用いられた。

②「**あなたがたは、もう満ち足りています**」

③「**すでに豊かになっています**」

④「**私たち抜きで王様になっています**」
⑤つまり、キリストの御座の裁きが終わったかのような状態になっている。
⑥この誤解を解くために、パウロは、当てこすり（sarcasm）を用いる。
（例話）京都の老舗のお茶屋の息子が、新茶を買いに行った。

(3)「**いっそのこと、本当に王様になっていたらよかったのです。そうすれば、私たちもあなたがたとともに、王様になれたでしょうに**」
①コリントの信者たちの間には、終末的祝福の先取りが見られる。
②今は、王として支配する時ではない。
③クリスチャン生活は、しもべとして神の計画に仕える生活である。

3. 9～10 節

1Co 4:9 私はこう思います。神は私たち使徒を、死罪に決まった者のように、最後の出場者として引き出されました。こうして私たちは、世界に対し、御使いたちにも人々にも見せ物になりました。
1Co 4:10 私たちはキリストのために愚かな者ですが、あなたがたはキリストにあって賢い者です。私たちは弱いのですが、あなたがたは強いのです。あなたがたは尊ばれていますが、私たちは卑しめられています。

(1) ローマの凱旋将軍の比ゆ
①勝利した将軍は、凱旋行列を率いて行進する。
②凱旋行列の最後に、捕虜たちの群れが続く。
③やがて捕虜たちは、闘技場に引き出され、野獣と対決させられる。
④使徒たちは、捕虜たちと同じように「**見せ物**」になった。

(2) コリントの信者たちと使徒たちの対比
①彼らは賢い者であるが、使徒たちは愚かな者である。
②彼らは強いが、使徒たちは弱い。
③彼らは尊ばれているが、使徒たちは卑しめられている。
④彼らは、使徒たちを見倣うのではなく、すでに勝利者になっている。

4. 11～13 節

1Co 4:11 今この時に至るまで、私たちは飢え、渇き、着る物もなく、ひどい扱いを受け、住む所もなく、
1Co 4:12 労苦して自分の手で働いています。ののしられては祝福し、迫害されては耐え忍び、

1Co 4:13 中傷されては、優しいことばをかけています。私たちはこの世の屑、あらゆるものの、かすになりました。今もそうです。

(1) さらにパウロは、福音のためにどこまで苦難を負っているかを証しする。

①「**飢え、渇き、着る物もなく、ひどい扱いを受け、住む所もなく**」

②「**苦労して自分の手で働いています**」

＊ギリシア人は、肉体労働を軽蔑した。

③「**ののしられては祝福し、迫害されては耐え忍び、中傷されては、優しいことばをかけています**」

＊キリストの足跡をたどっている。

④「**私たちはこの世の屑、あらゆるものの、かすになりました。今もそうです**」

＊コリントの信者たちとは、対照的である。

Ⅱ．最後の訴えと勧め（14～21 節）

1. 14～15 節

1Co 4:14 私がこれらのことを書くのは、あなたがたに恥ずかしい思いをさせるためではなく、私の愛する子どもとして諭すためです。

1Co 4:15 たとえあなたがたにキリストにある養育係が一万人いても、父親が大勢いるわけではありません。この私が、福音により、キリスト・イエスにあって、あなたがたを生んだのです。

(1) パウロは、新しい比ゆ（父と子の関係）に移行する。

①「**あなたがたに恥ずかしい思いをさせるためではなく、**」

＊この手紙は、他教会でも読まれる。

②高慢は、決して軽い罪ではなく、重大な霊的欠陥である。

③それゆえ、霊の父としてやさしく諭す。

④父として諭す内容が拒否されるなら、より強硬な手段に訴えることになる。

(2) キリストにある養育係が一万人いようとも、霊の父はパウロだけである。

①パウロの伝道によって、彼らは救われた。

②その後、彼らを霊的に指導した教師たちがたくさん出た。

＊養育係は、子どもの家庭教師となるローマ時代の奴隷である。

2. 16 節

1Co 4:16 ですから、あなたがたに勧めます。私に倣う者となってください。

(1)「**私に倣う者となってください**」

①ユダヤ人の子どもは、父親の姿をまねて育つ。

②ユダヤ教のラビと弟子の関係は、父と子の関係にたとえられる。
③勝利主義から、しもべの生活への移行が勧められている。

3. 17 節

1Co 4:17 そのために、私はあなたがたのところにテモテを送りました。テモテは、私が愛する、主にあって忠実な子です。彼は、あらゆるところのあらゆる教会で私が教えているとおりに、キリスト・イエスにある私の生き方を、あなたがたに思い起こさせてくれるでしょう。

(1) さらにパウロは、弟子のテモテを送ったと言う。
①テモテもパウロの霊の子で、教えと行動が一致している神の器である。
②テモテは、パウロの代理人として奉仕をする。
③そのテモテから学びなさいというのである。

4. 18～20 節

1Co 4:18 あなたがたのところに私が行くことはないだろうと考えて、思い上がっている人たちがいます。
1Co 4:19 しかし、主のみこころであれば、すぐにでもあなたがたのところに行きます。そして、思い上がっている人たちの、ことばではなく力を見せてもらいましょう。
1Co 4:20 神の国は、ことばではなく力にあるのです。

(1) コリントの教会には、パウロの権威を疑う者たちがいた。
①彼らは、パウロはすぐに計画を変更すると考えていた（2 コリ 1：17)。
②パウロの手紙は重みがあるが、実際は弱々しいと思っていた（2 コリ 10：10)。

(2) パウロは、主の御心なら、すぐにでもコリントに行く用意があると語る。
①その際には、高慢でことば数だけが多い人たちの力を見せてもらおう。
②「**神の国は、ことばにはなく力にあるのです**」
＊この神の国は、千年王国ではなく、普遍的な神の支配である。
＊この力は、聖霊の力である。
＊パウロは、この力を用いて伝道した。
＊パウロは、同じ力を訓戒のために用いる。
＊ことば数の多さではなく、神の力を体験しているかどうかである。

5. 21 節

1Co 4:21 あなたがたはどちらを望みますか。私があなたがたのところに、むちを持って行くことですか。それとも、愛をもって柔和な心で行くことですか。

(1)「むちを持って行く」

①ギリシア・ローマの視点では、「むち」は訓戒の象徴である。

②コリントの信者たちの態度が変化しないなら、パウロは訓戒者として行く。

③変化するなら、柔和な父として行く。

結論

1. 分派の原因

(1) コリントの信者たちは、この世の視点で霊的リーダーたちを評価していた。

①不信者の視点

(2) 霊的リーダーたちを見下すと、彼らの奉仕から最大の祝福を引き出せなくなる。

①永遠のいのちの実質を体験できなくなる。

(3) コリントの信者たちは、聖霊が行う聖化の働きを受け入れていなかった。

①御霊の賜物は豊かであったが、御霊の実が欠けていた。

2. 分裂の解決

(1) 指導者たちを見倣うこと。

①彼らは、十字架を負って、謙遜に歩んでいる。

(2) 指導者たちの召しを理解すること。

①彼らには、神の「奥義」が委ねられている。

＊4：1～2

1Co 4:1 人は私たちをキリストのしもべ、神の奥義の管理者と考えるべきです。

1Co 4:2 その場合、管理者に要求されることは、忠実だと認められることです。

②彼らは、ゴルゴタへの道を歩むことが期待されている。

＊4：9

1Co 4:9 私はこう思います。神は私たち使徒を、死罪に決まった者のように、最後の出場者として引き出されました。こうして私たちは、世界に対し、御使いたちにも人々にも見せ物になりました。

③彼らは、信者を励まし、ときには叱責することが期待されている。

＊4：14

1Co 4:14 私がこれらのことを書くのは、あなたがたに恥ずかしい思いをさせるためではなく、私の愛する子どもとして諭すためです。

コリント人への手紙第一　9 回
教会内の無秩序
―近親相姦の罪－
5：1～13

はじめに

1. 文脈の確認
   (1) イントロダクション（1：1～9）
   (2) 教会内の分裂（1：10～4：21）
   (3) 教会内の無秩序（5～6）
      ①近親相姦の罪（5：1～13）
      ②信者同士の裁判（6；1～11）
      ③性的汚れ（6：12～20）

2. 注目すべき点
   (1) 分派の問題は、教会における権威の欠如を示している。
   (2) 権威が欠如しているので、教会内で懲戒が実行されていない。
   (3) パウロは、3 つの問題を取り上げる。
      ①近親相姦の罪
      ②信者同士の裁判
      ③性的汚れ

3. アウトライン（近親相姦の罪）
   (1) パウロの裁定（1～5 節）
   (2) 過越の祭りからの教訓（6～8 節）
   (3) 罪にとどまる信者との交わり（9～13 節）

4. 結論：1 コリ 5：5 の意味
   (1) その他の事例
   (2) 裁きの目的

近親相姦の罪に対する対処法について学ぶ。

Ⅰ．パウロの裁定（1～5 節）

1. 1 節

1Co 5:1 現に聞くところによれば、あなたがたの間には淫らな行いがあり、しかもそれは、異

邦人の間にもないほどの淫らな行いで、父の妻を妻にしている者がいるとのことです。

(1) 分派の問題に続いて、懲戒の欠如という問題が取り上げられる。

①教会の中に、義理の母を妻にしている者がいた。

＊父は死んだか、離婚したかのいずれかである。

＊妻に対する懲戒は書かれていないので、彼女は信者ではないと思われる。

②ユダヤ人指導者も、教会の指導者も、近親相姦を重大な罪と理解していた。

＊レビ 18：8

Lev 18:8 あなたの父の妻の裸をあらわにしてはならない。それは、あなたの父の裸をあらわにすることである。

＊申 22：30

Deu 22:30 だれも、父の妻を妻にして自分の父の恥をさらしてはならない。

③律法の時代であれば、死罪に値するが、今は恵みの時代である。

＊パウロは、別の解決法を提示する。

⑤近親相姦は、異邦人の間にもないほどの淫らな行いである。

＊ローマ法もこれを禁じていた。

＊信者たちは、隣人に伝道しながら、未信者よりも淫らな行いをしていた。

2. 2 節

1Co 5:2 それなのに、あなたがたは思い上がっています。むしろ、悲しんで、そのような行いをしている者を、自分たちの中から取り除くべきではなかったのですか。

(1)「**あなたがたは思いあがっています**」

①彼らは、キリスト者の自由をはきちがえていた。

②あるいは、寛容の精神を誇りとしていた。

③あるいは、この世の価値観の影響を受けていた。

④本来は、その罪を嘆き、本人が悔い改めるまで教会から排除すべきであった。

3. 3 節

1Co 5:3 私は、からだは離れていても霊においてはそこにいて、実際にそこにいる者のように、そのような行いをした者をすでにさばきました。

(1) パウロによる裁定

①コリントの信者たちは、教会内の淫らな行いについて無関心であった。

②パウロは、使徒の権威を用いてその者をすでに裁いた。

③そこに行くまでもなく、あたかもそこにいる者のように、裁きを下した。

④1 コリ 4：5

1Co 4:5 ですから、主が来られるまでは、何についても先走ってさばいてはいけません。主は、

闇に隠れたことも明るみに出し、心の中のはかりごとも明らかにされます。そのときに、神からそれぞれの人に称賛が与えられるのです。

＊他の信者の信仰の度合いを先走って裁いてはいけないということ。

＊罪の裁きは、ただちに行う必要がある。

4. 4～5 節

1Co 5:4 すなわち、あなたがたと、私の霊が、私たちの主イエスの名によって、しかも私たちの主イエスの御力とともに集まり、

1Co 5:5 そのような者を、その肉が滅ぼされるようにサタンに引き渡したのです。それによって彼の霊が主の日に救われるためです。

(1) 裁きの内容

①コリントの信者とパウロの霊が、主イエスの名によって集まった。

②つまり、主イエスの御力（権威）を行使するために集まったのである。

③そして、主イエスの名によって、その人をサタンに引き渡した。

(2) 裁きの目的

①懲戒の目的は、信仰の回復である。

II．過越の祭りからの教訓（6～8 節）

1. 6 節

1Co 5:6 あなたがたが誇っているのは、良くないことです。わずかなパン種が、こねた粉全体をふくらませることを、あなたがたは知らないのですか。

(1) 過越の祭りを例にとり、道徳的罪を教会から取り除くことの重要性を教える。

①ここでの教えは、罪を犯している人のためではなく、教会のためである。

(2) 自らの寛容を誇ることは、良くないことである。

①わずかのパン種が、粉全体をふくらませる。

②道徳的罪は、教会全体に影響を与えるパン種である。

③パン種ということばが象徴的に用いられる場合は、罪を指す。

2. 7 節

1Co 5:7 新しいこねた粉のままでいられるように、古いパン種をすっかり取り除きなさい。あなたがたは種なしパンなのですから。私たちの過越の子羊キリストは、すでに屠られたのです。

(1) パン種は、影響が広がる前に、早めに処置する必要がある。

①「**新しいこねた粉**」とは、パン種の入っていない粉のことである。

＊クリスチャンは、キリストにあって義とされた。

②「**古いパン種をすっかり取り除きなさい**」

＊聖化が実際生活で実現するように励む必要がある。

(2) 過越の祭りでは、子羊をほふった後、種なしパンを食する。

①すでに過越の子羊キリストは、ほふられた。

②新約時代の信者は、パン種を取り除いた状態で、神を礼拝せねばならない。

3. 8 節

1Co 5:8 ですから、古いパン種を用いたり、悪意と邪悪のパン種を用いたりしないで、誠実と真実の種なしパンで祭りをしようではありませんか。

(1)「**祭りをしようではありませんか**」

①これは特定の祭りではなく、クリスチャン生活のことである。

②クリスチャンにとっては、毎日が祭りのようなものである。

③神の子羊（イエス・キリスト）がほふられたので、パン種のない生活をする。

(2) 救われる前の姿

①古いパン種

②悪意と邪悪のパン種

(3) 救われた後の姿

①誠実と真実という種なしパン

Ⅲ. 罪にとどまる信者との交わり（9～13 節）

1. 9～10 節

1Co 5:9 私は前の手紙で、淫らな行いをする者たちと付き合わないようにと書きました。

1Co 5:10 それは、この世の淫らな者、貪欲な者、奪い取る者、偶像を拝む者と、いっさい付き合わないようにという意味ではありません。そうだとしたら、この世から出て行かなければならないでしょう。

(1)「**前の手紙**」

①この手紙の前に、もう一通の手紙があった。

＊パウロが書いたことがすべて聖書になったわけではない。

②「**淫らな行いをする者たちと付き合わないように**」と書いた。

③その真意は、コリントの信者たちに十分に伝わらなかった。

④そこで彼は、さらに詳しく指示を出すことにした。

(2) 罪人たちとの交際を禁止するなら、コリントの町には住めなくなる。

①この世の淫らな者

②貪欲な者

③奪い取る者

④偶像を拝む者

2. 11 節

1Co 5:11 私が今書いたのは、兄弟と呼ばれる者で、淫らな者、貪欲な者、偶像を拝む者、人をそしる者、酒におぼれる者、奪い取る者がいたなら、そのような者とは付き合ってはいけない、一緒に食事をしてもいけない、ということです。

(1) パウロの勧告は、「**兄弟と呼ばれる者**」との交わりに関するものである。

①信者でありながら、罪の中にとどまっている人とは交わってはならない。

②未信者との付き合いよりも、危険である。

③「**一緒に食事をしてもいけない**」は、初代教会の習慣を前提とした命令。

(2) 6 種類の罪人が例示される。

①淫らな者

②貪欲な者

③偶像を拝む者

④人をそしる者（追加）

＊習慣的にことばの罪を犯している人

⑤酒におぼれる者（追加）

＊酒に支配されることは罪である。

⑥奪い取る者

3. 12～13 節

1Co 5:12 外部の人たちをさばくことは、私がすべきことでしょうか。あなたがたがさばくべき者は、内部の人たちではありませんか。

1Co 5:13 外部の人たちは神がおさばきになります。「あなたがたの中からその悪い者を除き去りなさい。」

(1) 近親相姦に関するパウロの結論

①教会外の人たちのことは、神が裁かれるので神に委ねておけばよい。

②しかし、教会内の罪の問題に関しては、そのまま放置しておいてはならない。

③もし悔い改めないなら、「悪い者」を教会の交わりから取り除く必要がある。

結論：1 コリ 5：5 の意味

1Co 5:5 そのような者を、その肉が滅ぼされるようにサタンに引き渡したのです。それによって彼の霊が主の日に救われるためです。

1. その他の事例

(1) 1 テモ 1：20

1Ti 1:20 その中には、ヒメナイとアレクサンドロがいます。私は、神を冒涜してはならないことを学ばせるため、彼らをサタンに引き渡しました。

①これは使徒だけが持っている権威で、私たちにはないものである。

(2) 1 ヨハ 5：16～17

1Jn 5:16 だれでも、兄弟が死に至らない罪を犯しているのを見たなら、神に求めなさい。そうすれば、神はその人にいのちを与えてくださいます。これは、死に至らない罪を犯している人たちの場合です。しかし、死に至る罪があります。これについては、願うようにとは言いません。

1Jn 5:17 不義はすべて罪ですが、死に至らない罪もあります。

2. 裁きの目的

(1)「その肉が滅ぼされるように」

①教会の会員である間は、神の守りが与えられている。

②しかし、除名になった途端に、神の守りは取り除かれる。

③その人は、サタンの攻撃にさらされる。

④死期は、サタンによって決められる。

⑤寿命が尽きる前に死ぬこともある。

⑥使 5：1～11 で、アナニアとサッピラはすぐに死んだ。

⑦1 コリ 11：27～30 で、聖餐式を冒とくした者たちへの裁きが語られている。

(2)「それによって彼の霊が主の日に救われるためです」

①懲戒の目的は、信仰の回復である。

②肉体の試練は、悔い改めをもたらす可能性がある。

③ここでの救いは、厳しい評価を受けることからの救いである。

＊もし悔い改めたなら、より良い評価を受ける道が拓かれる。

＊そうでなくて早死にするなら、罪を犯し続けるということを回避できる。

コリント人への手紙第一　10 回
教会内の無秩序
―信者同士の裁判―
6：1～11

はじめに

1. 文脈の確認
   (1) イントロダクション（1：1～9）
   (2) 教会内の分裂（1：10～4：21）
   (3) 教会内の無秩序（5～6）
      ①近親相姦の罪（5：1～13）
      ②信者同士の裁判（6；1～11）
      ③性的汚れ（6：12～20）

2. 注目すべき点
   (1) 分派の問題は、教会における権威の欠如を示している。
   (2) 権威が欠如しているので、教会内で懲戒が実行されていない。
   (3) パウロは、3 つの問題を取り上げる。
      ①近親相姦の罪
      ②信者同士の裁判
      ③性的汚れ
   (4) ユダヤ人の場合は、共同体や会堂の長老たちの裁定を仰いだ。
   (5) ギリシア人の場合は、法廷闘争を好んだ。
      ①コリント教会の問題は、聖書的自己認識の欠如にあった。
      ②教会は、キリストによって贖われた共同体である。
      ③教会は、終末的な共同体である。

3. アウトライン（信者同士の裁判）
   (1) 教会の恥（1～6 節）
   (2) パウロの裁定（7～11 節）

4. 結論：現代のクリスチャンが直面するチャレンジ

信者同士の裁判に対する対処法について学ぶ。

Ⅰ．教会の恥（1～6 節）

1. 1 節

1Co 6:1 あなたがたのうちには、仲間と争いを起こしたら、それを聖徒たちに訴えずに、あえて、正しくない人たちに訴える人がいるのですか。

(1) 2 人の信者が、お互いをこの世の法廷に訴えている。

①「**仲間**」（隣人）は、文脈上、他の信者である。

②「**正しくない人たち**」は、不信者（教会外の人）である。

③異邦人の信者が、不信者の裁判官に裁定を仰いだのである。

④これ自体が、コリント教会が健全に機能していないことを示している。

2. 2 節

1Co 6:2 聖徒たちが世界をさばくようになることを、あなたがたは知らないのですか。世界があなたがたによってさばかれるのに、あなたがたには、ごく小さな事件さえもさばく力がないのですか。

(1)「**あなたがたは知らないのですか**」

①この章に 6 回出てくる（2、3、9、15、19 節）。

②それに続いて、重要なテーマが教えられる。

(2)「**聖徒たちが世界をさばくようになる**」

①この裁きは、主イエスの再臨の直後に行われる。

②パウロは、この教理をコリントの信者たちに教えていたに違いない。

③1 テサ 4：17

1Th 4:17 それから、生き残っている私たちが、彼らと一緒に雲に包まれて引き上げられ、空中で主と会うのです。こうして私たちは、いつまでも主とともにいることになります。

④信者は将来、不信者を裁くようになる（終末論的自己認識）。

⑤それゆえ、信者は今、相互間の些細な争いを裁くことができるはずである。

3. 3～4 節

1Co 6:3 あなたがたは知らないのですか。私たちは御使いたちをさばくようになります。それなら、日常の事柄は言うまでもないではありませんか。

1Co 6:4 それなのに、日常の事柄で争いが起こると、教会の中で軽んじられている人たちを裁判官に選ぶのですか。

(1)「**あなたがたは知らないのですか**」

①2 度目の登場

(2)「**私たちは御使いたちをさばくようになります**」

①神はパウロを通して、この驚くべき真理を啓示された。

②信者は、将来、御使いたちを裁くようになる（終末論的自己認識）。

③ユダ 6

Jud 1:6 またイエスは、自分の領分を守らずに自分のいるべき所を捨てた御使いたちを、大いなる日のさばきのために、永遠の鎖につないで暗闇の下に閉じ込められました。

④それなのに、日常の事項の争いが起こると、不信者のように振舞っている。

⑤教会が評価していない不信者の裁判官に裁定を仰いでいる。

4. 5～6 節

1Co 6:5 私は、あなたがたを恥じ入らせるために、こう言っているのです。あなたがたの中には、兄弟の間を仲裁することができる賢い人が、一人もいないのですか。

1Co 6:6 それで兄弟が兄弟を告訴し、しかも、それを信者でない人たちの前でするのですか。

(1)「**あなたがたを恥じ入らせるために、こう言っているのです**」

①恥とは、教会の中に兄弟の間を仲裁することができる賢人がいないということ。

②豊かな御霊の賜物は、どこに行ったのか。

③聖霊の内住と導きは、どこに行ったのか。

(2) 兄弟が兄弟を不信者の裁判官の前で告訴するのは、恥ずべきことである。

①その人は、教会よりも、世の法廷に訴えた方が正義を得られると考えている。

II．パウロの裁定（7～11 節）

1. 7～8 節

1Co 6:7 そもそも、互いに訴え合うことが、すでにあなたがたの敗北です。どうして、むしろ不正な行いを甘んじて受けないのですか。どうして、むしろ、だまし取られるままでいないのですか。

1Co 6:8 それどころか、あなたがた自身が不正を行い、だまし取っています。しかも、そのようなことを兄弟たちに対してしています。

(1) パウロは、当事者の信者に語りかけるが、内容は教会全体に向けたものである。

①訴訟の内容は、民事事件である（ビジネス関連か、土地の問題）。

②互いに訴え合うことが、判決が下る前にすでに負けていることをしめしている。

③愛を第一とする者が、主にある兄弟を訴えるのは、不名誉なことである。

④敗北よりもすぐれた方法がある。

＊不正な行いを甘んじて受ける。

＊だまし取られるままでいる。

(2) コリントの信者たちの罪

①これらのすぐれた方法を実行していない。

②自分自身が不正を行い、だまし取っている。

③そのようなことを兄弟たちに対してしている。

2. 9～10 節

1Co 6:9 あなたがたは知らないのですか。正しくない者は神の国を相続できません。思い違いをしてはいけません。淫らな行いをする者、偶像を拝む者、姦淫をする者、男娼となる者、男色をする者、

1Co 6:10 盗む者、貪欲な者、酒におぼれる者、そしる者、奪い取る者はみな、神の国を相続することができません。

(1)「**あなたがたは知らないのですか**」

①3 度目の登場

(2)「あなたがた自身が不正を行い」(8 節) の動詞は、「アディケオウ」である。

①この動詞を基に、「正しくない者」(アディコス) のリストアップに入る。

②パウロは、思い浮かぶ順番に「正しくない者」を挙げていると思われる。

③「**正しくない者**」とは、誰か。

＊信者であっても、不正を行い、正しくない者になる可能性がある。

＊この文脈では、「正しくない者」は不信者を指している。

＊不信者の特徴は、習慣的に不正を行うということである。

④「**正しくない者**」は神の国を相続できない（神の国に入ることができない)。

(3)「**正しくない者**」のリスト

①淫らな行いをする者

②偶像を拝む者

③姦淫をする者

④男娼となる者

⑤男色をする者

⑥盗む者

⑦貪欲な者

⑧酒におぼれる者

⑨そしる者

⑩奪い取る者

3. 11 節

1Co 6:11 あなたがたのうちのある人たちは、以前はそのような者でした。しかし、主イエス・キリストの御名と私たちの神の御霊によって、あなたがたは洗われ、聖なる者とされ、義と認められたのです。

(1) コリントの信者たちは、救われる前はそのような者であった。

①それゆえ、新生した者として、神の召しにふさわしい歩みをすべきである。

②救いが保証されていることは、放縦生活の口実にはならない。

③行いのない信仰は、死んだ信仰である。

④放縦な生活を続ける者は、本当に救われているかどうか吟味すべきである。

(2) 彼らは、三位一体の神によって救われた。

①聖霊によって洗われた。

＊テト 3：5

Tit 3:5 神は、私たちが行った義のわざによってではなく、ご自分のあわれみによって、聖霊による再生と刷新の洗いをもって、私たちを救ってくださいました。

②御子にあって聖なる者とされた。

＊1 コリ 1：2

1Co 1:2 コリントにある神の教会へ。すなわち、いたるところで私たちの主イエス・キリストの名を呼び求めているすべての人とともに、キリスト・イエスにあって聖なる者とされ、聖徒として召された方々へ。主はそのすべての人の主であり、私たちの主です。

③父なる神の前で義と認められた。

＊ロマ 8：33

Rom 8:33 だれが、神に選ばれた者たちを訴えるのですか。神が義と認めてくださるのです。

結論：現代のクリスチャンが直面するチャレンジ

1. ギリシア・ローマ文明における同性愛

(1) 男性同士の性行為は、社会的に容認されていた。

(2) プラトンの「饗宴」の中には、同性愛を称賛する演説が含まれている。

(3) 最初の 15 人のローマ皇帝のうち 14 人が同性愛者であったと言われている。

(4) 若い男性が年上のメンターと性的な関係を持つことがよくあった。

2. 日本の戦国時代における同性愛

(1)「衆道」（しゅどう）として知られ、社会的に容認されていた。

(2) これは、若い武士（小姓）と年長の武士との間の愛情や性的な関係を指す。

(3) これは、教育的な要素を含むメンターとメンティーの関係でもあった。
(4)「衆道」は、当時の日本における歴史的、文化的文脈の中で理解すべきである。

3. 男娼となる者
(1) ギリシア語で「マラコス」である。
(2) 物理的な意味では、柔らかい物質や布、軟弱な物体を指す。
(3) 男性に対して使われる場合は、否定的な意味合いを持つ。
①身体的または精神的に軟弱で、非男性的である。
②古代ギリシア社会における男性の理想像とはかけ離れている。
(4) この用語が同性愛の文脈で使われる場合は、受動的な役割を取る男性を指す。
(5) 報酬を得て性的なサービスを提供する男娼を指す場合もある。
①アポロ神殿には、男女の礼拝者たちを客とする神殿男娼がいた。

4. 男色をする者
(1) ギリシア語で「アルセノコイティス」である。
(2)「アルセン」が「男性」を、「コイテー」が「床、寝床」（性的な行為）を指す。
(3) 多くの学者が、同性間の性的行為、特に男性同士の行為を指すと解釈している。
(4)「マラコス」は受動的な役割、「アルセノコイティス」は能動的な役割を果たす。

5. 現代のクリスチャンが直面するチャレンジ
(1) 現代社会の道徳的基準によって聖書を再解釈するという誘惑がある。
①聖書は、字義通りに解釈する必要がある。
(2) LGBT の方々に対して極端な対応をするという危険性がある。
①行為は憎んでも、本人を憎んではならない。
②LGBT の方々を無視したり、軽蔑したり、憎んだりしてはならない。
③私たちはみな罪人であり、そこから救われた。
④教会は、罪人が新生体験をする場とならなければならない。
(3) 愛を強調するあまり、妥協してしまう可能性がある。
①愛をもって真実を語り続けるのは、クリスチャンにとって最大の挑戦である。